

砂丘

宮本百合子

青空文庫

こまかいかげろうは砂の間からぬけ出したようにもえて居て海の色は黒いまでに蒼い、水と空と空の色、そのさかえからポツカリういたような連山の姿、いかにも春らしい、たるんだような、なつかしいような景色である。

風は有つても砂をまきたてるほどでもないので丁度いいかげんにネルの軀を吹いて行く、こののどかなうきうきした娘のような景色の中を恥かしいほど重つくるしい陰気な心持で渚づたいに、別荘のわき、両方から砂丘がせまって一寸したくぼい形になつて居るそこへ私は向つて行く、悲しみと名づくべきほどのものでもなくて居て又たえがたい悲しさとなやましさに自分のつまさきば

かり見て居た私の目に急にその二つならんだ一片の砂丘はいかに大きなおかすことの出来にくいもののように見られた。それを見た時丁度、そうっと他人の懷中物をかすめたすりが通りすぎりに監獄の垣を見てふるえるように私の心と軀は何とも云われない悪寒とふるえをおこした、けれども、なきながら「なんだい、なくもんか男だもの」と云う子供のそれのように強いてのつけ元気にザクリザクリと心地の好い砂の音にそれをわすれるようにと思つて歩いた。段々近よつて段々いやな思をさせる砂丘のはじから中の窪地を見ると、居た女は！ 今日逢つて何を云われるのか、自分に対してどんな考を持つて居るか、

こんな事は、一向考えずと好い事なんだ、と云うようにのんき

らしく棒のような足を二本つんと前に張つてコーモリを立てて日にてらされる右の方をかばいながら海を見て居る。

私はそこに立ちすくんだようになって、そのたるんだ皮膚や、考のないことを明らさまに表して居る眼、口元などを一わたりズーと見つめた後今までの事をズーと考えて見た。私はあの女の無邪氣にハキハキとして居て男氣が有り、わり合に考も有つて男の手管にまかれるような事は一度もない、

と云う事をきいてまだ言葉も交わさない内、まだかおも見ない内から少なからず動かされ、或る特別なような好奇心に動かされて居た。

始めて彼の女を□けた女、今までに一辺も見た事のないような

張の有る、力のみちみちた、はきはきした口振の彼の女を見てどんなによろこんだ事だろう。

それから、妙なわけになつて居るが段々その力つよさと男氣の有るのが消え始めた。それでも私は、自分のたよりにするものが出来た氣の張りのゆるんだため、あの心地好いツンツンした素振も、ハキハキした口のききかたも忘れてしまったものだろうと少しは喜びも交つて心の中に育つて居た。それから後も、その人が變つたようになってからも度々あつたが別にそれほどいやな、毛虫にさわるような心持にはならなかつた。それが今日、今、たつた今、あの女のかおを見ると、あのだらけた皮膚の色と、いくじなさそうな様子とが毛虫よりいやに思われて來た、そうし敵でも

見るように、そのかおの筋肉の一寸した動揺でも見のがしてなるものかと云うようにそのかおを見つめて居た、心の中では又ささやいて居る。

いくら私をどう思ってたからと云ってああまで馬鹿にうすのろになるはずはない、却って自分がどうか思つてりやあ、よけいに気位の高いつんとした様子をして居るものだ、それがあの女は一年も半年も立たないうちに馬鹿になりうすのろになつてしまった。かざつて居たのだ、

だまして居たのだ、こつちがはかられたのだ！

はげしい馬鹿馬鹿しさの心と、不平の心が心の中をはしりまわつて居る、いつその事ここにかくれて居て彼の女の様子を見て居

ても見ようか。私はいつまで立っても来ない、あきてさぞあくびをする事だろう、いよいよ私の来ないと知った時はきつとのそのそと足をはこんで外の男のところへ遊に行くにきまって居るんだ。こんなかわいそうなむほんぎは心の片すみに起った、そして私はその時の女のこまったらしい顔や、口の中で云うブツブツ口ごとを思つて思わず高声に心の底をゆすり出したように笑った。その声におどろいて女はくると向いて、今更らしくつくろうた声で、

「マア、一寸も私しや知らなかった、いついらつしやったんです？」

「たつた今、きたばかりで何故だか私は吹き出してしまった」

私は長い間立ちどまっていろいろな事を思った様子ははりでついたほども見せなかった、私は見せても見えないような彼の女だからだ。

「よつぽどまったんかい」

「ナニ、ほんの一寸、だけど、またれる身よりも待つ身の何とかってね……」

女は洋傘の甲斐絹のきれをよこに人指し指と、中指でシュシュとしごきながらふるいしれきったつまらないことを云った。

それで自分では出来したつもりで、かるいほほ笑みをのぼせて居る。

私はまるで試験官のようなひやつこいはつきりした心地で女の

心を見とおすように傍にひかえてひややかに笑って居る。

「よく来られたネー、私は大抵だめだろうと思つてたんだが」

「ずいぶん工夫してネ、それでもやつと、夜までは……かまわないですよ」

又女は何か心の中にわるいたくらみをもつて居るおやじのように笑つてチラリと私のかおをすきみのように見る。

「お前知つてゐるんかい」

「何を？……」

「何をつて私のこれから云おうて云う事をさね」

いきなり妙な問を出された女は、答える言葉もこの言葉の意味も考える余ゆうもないようにあわてた声で、

「神様じゃないもん、そんな事……」

「そんなら私が何を云うかも知れないでただ来たんだね……」

「貴方になら何を云われてもと思つてますもん」

「有がたいネ、ほんとにおやすくないわけだ」

だれの男にも云いなれたその御ついしように又私にもくりかえされるのかと思つて又とない不快な心持になりながらそれを押えつけるように云つた。女はだまつて洋傘の切を音たてて居る。

二人はスレスレの心持になつてだまつて顔を見合せて居る、女の小ばなにはあぶらがういて居てまだどこかに若々しい心が有ることをしめして居る。

「それでこれから先御前どうするつもりなんだい」

「どうするつもりって……そんなにハッキリなんかわかって居やしないけど」

「好い旦那でも見つかったんかい」

「また、旦那旦那って何故そう御云いなさるんだろう。そんなものなんかあてにしてやしませんやネ」

この言葉だけは昔の勢をのこして居るようにハギレよくひびいた。

少しでも女の様子に昔の有様の見えたと云うことは廃坑から又、新らしい石炭の層を見出したその時よりも嬉しい胸のおどる心地がして心からゆすり出るようなほほ笑みを私は口にかべながら、「マア、珍らしい事だ、よくそんな今までにないハッキリした口

調に私のよろこぶような気持の好い事を云つて呉れたネ」

「貴方つて云う方は妙な御方だ事、私の云う事で私はこんな事ばと思つてムカムカして云う口調を貴方はよろこんで居らつしやる、だから、まるで私の嬉しが事とあべこべの事をよろこんで居らつしやるんですネ」

「世の中の苦勞を、かみしめたものは、御前の思つてるよりあべこべの事をよろこぶものなんだ、そらね、赤坊から一寸育つたような小供はいい子だからねと云われるとくだらない用事をさせられてもよろこぶだろう、それと同じなんだネ」

「そんなもんでしようか」

「それで御前はこれからどうすると云うんだネ」

「どうするって、どこか変えようかと思ってるんですよ」

「かえるもいいが、あんまり変えようと何とか悪いことがおこりやしないかと思うんだけど………」

「それもそうだと思つてネ、今迷つて居るんですよ」

「まさか御前だもの、くだらないもんの手にかかつて手をやかれるような事はしまいがね、とにかくよく考えて見ての上さ」

「そりやネ、もちろん、誰と云つて話相手になる人もなし自分で自分をまもつてかなくちやあならないんだから」

「まあよく考えるさ」

青空文庫情報

底本：「宮本百合子全集 第三十巻」新日本出版社

1986（昭和61）年3月20日初版発行

※1913（大正2）年6月4日執筆の習作です。

入力：柴田卓治

校正：土屋隆

2008年2月28日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.waozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたった

のは、ボランティアの皆さんです。

砂丘

宮本百合子

2020年 7月12日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>